

県民と郷土を結ぶ総合博物館

青森県立郷土館だより

News from the Aomori Prefectural Museum

通巻185号 令和6年(2024)3月21日 Vol.54 No.2

令和5年度青森県立郷土館サテライト展

生誕130年 今純三

— 純三が描いた戦前の青森 —



「風景」銅版、紙、昭和11(1936)年 23.7×34.3cm

青森県立郷土館では、青森県立美術館のご協力により、令和5(2023)年9月30日から同6年1月28日まで、同館コレクション展(2023-3)内で令和5年度サテライト展「生誕130年 今純三—純三が描いた戦前の青森—」を開催しました。

青森県弘前市出身の今純三(1893~1944年)は、日本の近代銅版画家を代表する一人で、本県の洋画や版画、美術教育の礎を築きました。

本展では、彼の画業を振り返り、代表作である版画集『青森県画譜』(*)や『創作版画小品集(エッチング小品集)』に描かれた昭和初期の青森の風景や人々の暮らしを実物資料をまじえて紹介しました。



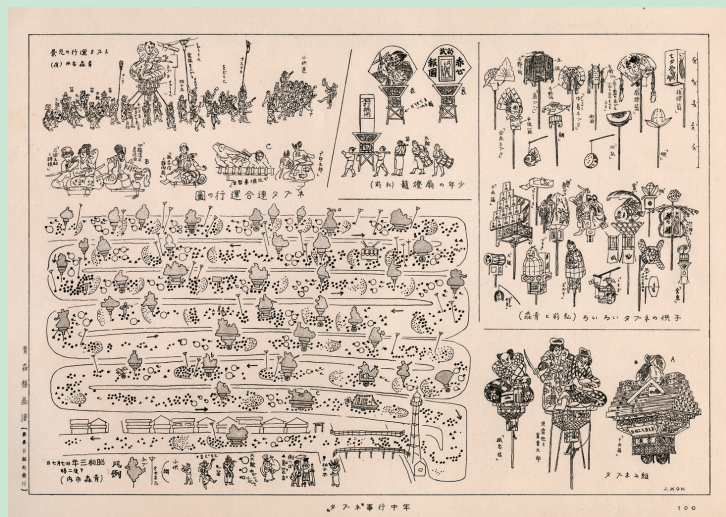
展示導入部では『青森県画譜』全100点を拡大映写して紹介。ここで映写されているのは、第1集の「最勝院五重塔」。



純三のスケッチ類を参考にして復元した昭和初期の子どもネブタも紹介しました。

※『青森県画譜』とは

県内の風景、寺社仏閣、街並み、人々の暮らし、年中行事などを描いた全100点からなる版画連作集。原画は銅版画や石版画で制作された。昭和8(1933)年10月に第1集が発行され、翌年9月の第12集で完結した。発行は東奥日報社。各画の大きさはB4判程度(約27cm×39cm)。



「年中行事『ネブタ』」『青森県画譜』第12集

生誕130年 今純三 — 純三が描いた戦前の青森 —

青森県弘前市で、代々医者の子に生まれた純三は、医学の道に進むことを期待されましたが、家族の反対を押し切って画家になることを決意し、本郷洋画研究所に入ります。そして、当時最も権威のある文展（文部省美術展覧会）、帝展（帝国美術院展覧会）で入選を果たし、洋画家として東京で活動をしていました。しかし、関東大震災（1923年）後、青森市に移住し、生活のために印刷の仕事しながら銅版画や石版画の研究を始めます。

純三の兄・和次郎（1888～1973年）は、建築・服飾・民俗学など幅広い分野で活動した研究者で、人々のくらしや街並みを調査・分析、それらを図表やイラストで記録して社会の変化を考えるという「考現学」を提唱したことで知られています。和次郎は、青森県に関する考現学調査を純三にも依頼しました。純三は、鋭い観察眼と優れた描写力を活かした調査記録を兄に送っています。

考現学調査を手伝ううちにその魅力に引き込まれた純三は、版画技法の研究と考現学手法である写実的検証をもとに、県内の自然景観や人々のくらしの写実的記録画ともいえる『青森県画譜』（1933・34年）を制作しました。さらに『創作版画小品集（エッチング小品集）』の制作に取り組みます。純三はまた、作品の制作だけでなく、版画技法の研究と後進の育成にも情熱を注ぎました。青森市合浦公園近くに自ら建てた住居を兼ねたアトリエには、関野準一郎ら多くの芸術を志す若者達が訪れました。

昭和14（1939）年に家族とともに再び上京、銅版画の普及のため、様々な仕事を引き受けつつ、版画の技法書『版画の新技术』（三國書房、1943年）を出版しますが、心身の酷使により発病し、世を去りました。

純三没後、長く家族が守ってきた作品や銅版画原版などの資料は、昭和42（1967）年に青森県立図書館に寄贈され、現在は郷土館が管理し調査研究を進めています。彼が残した仕事—『青森県画譜』や『創作版画小品集』— 実景に誠実な描写と考現学的視点は、当時の記録として歴史・民俗的にも非常に貴重なものです。
（担当・太田原慶子）



「自画像」平版、紙、昭和7（1932）年（26.5×18.5cm）

■今純三（1893～1944）
 兄は考現学を創始した今和次郎（1888～1973）
 1893（明治26）年 青森県弘前市に生まれる
 1906（明治39）年 一家で東京に移住
 1913（大正2）年 文展に入選（「公園の初秋」）
 1919（大正8）年 帝展に入選（「バラライカ」）
 1923（大正12）年 青森市に移住
 1933（昭和8）年 『青森県画譜』制作（～34年）
 1935（昭和10）年 『創作版画小品集』に着手
 1944（昭和19）年 東京で病のため永眠



「市日」銅版・彩色、紙、昭和11（1936）年（23.5×34.5cm）



「郷土玩具図」『青森県画譜』第7集、平版、紙



「スケッチいろいろ」銅版、紙
 『創作版画小品集 第2集 浅虫の風景と風俗』から



「水族館附近」銅版、紙

令和5年度の連携展

青森県立郷土館では、館蔵資料や調査研究をもとに、県内の博物館や美術館、関係機関と連携協力しながら、地域性や特色に応じた展示事業を行っています。

◆県民福祉プラザ 絵はがきで見る昔の青森

連携機関・開催会場：県民福祉プラザ（青森市） 会期：令和5（2023）年7月15日～8月31日

青森市の県民福祉プラザを会場に開催した連携展は、当館が所蔵する県内の名勝地や町の様子などの戦前の写真絵はがきを紹介して郷土の魅力と歴史を身近に感じていただく機会とするというものでした。

身近な地域の歴史や景観の変遷により興味を持ってもらおうと、弘前市や浅虫周辺など、県民福祉プラザの職員の方々が撮影した現在の風景写真と並べて紹介しました。



「あおり旅ものがたり」
展示風景

◆深浦町歴史民俗資料館 あおり旅ものがたり

連携機関・開催会場：深浦町歴史民俗資料館（深浦町）

会期：令和5（2023）年10月21日～12月17日

深浦町歴史民俗資料館と連携した「あおり旅ものがたり」では、本州と北海道をつなぐ交通・交易の重要な場であり、美しい自然や美味しい食べ物などの豊富な観光資源に恵まれ、旅先での出会いから生まれる多くの「ものがたり」を秘めた青森の旅について、両館の資料から、近世の旅の道具、鳥瞰図、絵はがき、駅弁・ご当地土産関係資料等を展示し、より多くの皆様にその魅力を発信しました。

深浦に関する駅弁掛紙、菓子ほか土産物類については、開業堂（現在は閉店）の相馬英子さんや深浦町観光課の鈴木マグローさんら、地元の方々からの聞き取りや協力によって展示したことで、来館者は懐かしさを感じ、当時のエピソードを語り合う場となったようです。

◆常盤ふるさと資料館あすか 加藤武夫版画展～津軽の情景～

連携機関・開催会場：常盤ふるさと資料館あすか（藤崎町） 会期：令和6（2024）年1月5日～2月12日

青森市出身の版画家加藤武夫が描いた四季折々の津軽の風景を紹介しました。代表作「長寿林檎樹」シリーズ、「雪の津軽路りんご園」や「彩る白岩森林公園」など美しい色彩で表現された津軽各地の風景は、どこか懐かしく、身近な光景の美しさに気付かせてくれます。詩情豊かに表現された加藤の津軽の風景に、あらためて心を引かれた鑑賞者も多かったようです。

（連携展担当・中沢秀一）

NHK青森放送局主催・・・

連続テレビ小説 **ブギウギと淡谷のり子展**

令和6（2024）年2月17日から3月3日まで、青森県立美術館コミュニティギャラリーで開催された「ブギウギと淡谷のり子展」（主催：NHK青森放送局、共催：青森市教育委員会、当館）に青森市出身の昭和期を代表する歌手・淡谷のり子ゆかりの資料を出品しました。

のり子は、明治期の青森市有数の呉服商の跡取り娘として生まれました。青森高等女学校（現・県立青森高等学校）卒業後、母妹と上京し声楽を学びましたが、生活のため流行歌手になります。「別れのブルース」「雨のブルース」のヒットでブルースの女王と呼ばれました。NHK朝の連続テレビ小説「ブギウギ」主人公のモデル、笠置シズ子とはライバルであり親友でした。歌にかけた人生とふるさと青森の人々との交流を紹介しました。

（担当・太田原慶子）



のり子幼少期
（1歳前後）



会場と展示作業の様子



（左：実際に着用した衣装 右：愛用品の展示）

資料紹介 「みそ玉」のレプリカ (小川原湖民俗博物館旧蔵)

暑さ寒さも彼岸まで。各家庭で味噌づくりが始まる季節になりました。かつての味噌づくりは隣近所との共同作業でした。大豆を大きな釜で煮たのち、「兄嫁まんなか搗けやっとな搗け」などおもしろおかしく唄を歌いながら、臼に移した大豆を杵で搗いて潰しました。津軽地方では、潰した豆に米麴と塩をあわせて仕込みますが、南部・下北地方では、米を使わずに味噌をつくります。潰した大豆で「みそ玉」(写真)をつくり、縄でくくって1ヶ月ほど軒下に吊り下げておきます。空中を漂う自然の麹菌をつけることで、米麴を入れなくても味噌が作れるのです。全国的にみると、会津や信州など山間部の稲作が難しい地域にこの方法が伝わっています。写真は、下北郡東通村の大利地区でつくられていた「みそ玉」の複製資料(レプリカ)です。いま、大利で「みそ玉」を作る家は1軒だけになりました。複製ではありますが、本県の食文化を後世に伝える貴重な資料です。(民俗担当・増田公寧)



吊り下げられた「みそ玉」(再現展示)



「みそ玉」のレプリカ



実際の様子(昭和37年、下北半島)

資料紹介

県重宝 亀ヶ岡遺跡出土赤漆塗壺形土器(風韻堂コレクション)

令和4年度県重宝漆塗製品保存修理事業より



修理後：高さ17cm、口径7.0cm、胴径15.3cm



修理前

青森県立郷土館では、専門技術者による「県重宝漆塗製品保存修理事業」を平成30年度から実施しています。

当館の風韻堂コレクションには、つがる市木造の亀ヶ岡遺跡出土品などの漆塗製品が含まれています。特に重要なものは、県重宝(青森県指定文化財)に指定されています。

寄贈されてから約50年経過しており、漆塗膜の剥落など資料の状態に変化が見られるものについて、修理により経年変化を抑え、資料の保全とともに展示や貸出などの活用を図っています。

漆製品は縄文時代を通して技術が成熟していきます。令和4年度に修復を実施した赤漆塗壺形土器は、その頂点に達した亀ヶ岡文化を代表する漆塗土器の一つです。その技術や卓越したデザインを伝えています。

修理後は、三内丸山遺跡センターの令和5年度特別展「三内丸山と漆」に、出品し、展示されました。

今後も多くの資料を公開できるよう表面の剥落の恐れのある資料から、修理を続けていく予定です。(考古担当・齋藤岳)

